

沖繩

ヤブ

ヤブ

ヤブ

ヤブ

ヤブ

ヤブ

ヤブ

ヤブ

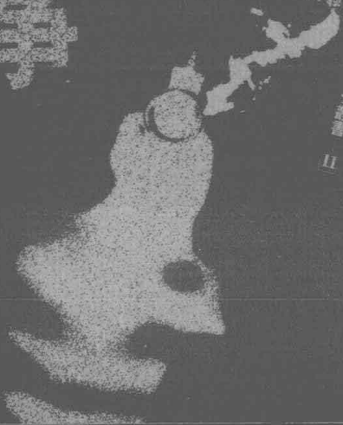
昭和二十五年五月一日
全訂版發行
昭和二十五年四月一日
初版發行
昭和二十五年四月一日
初版發行

沖繩

大島幸夫
北米ルターン叢書

II

戦争



著者■おおしま・ゆきお■

1937（昭和12）年、東京生まれ。

早大卒。毎日新聞社で長野支局、整理本部、社会部、毎日グラフ編集部を経て、現在はサンデー毎日編集部記者。

主な著書

『沖縄の日本軍——久米島の虐殺』（新泉社）『人間記録・戦後民衆史』（毎日新聞社）『不屈の闘魂・張本勲』（スポーツニッポン社）『ドキュメント日韓ルート』（講談社）など。

沖縄ヤクザ戦争

ルポルタージュ叢書11

1978年11月30日 初版第1刷
1981年3月1日 初版第4刷

定価＝1300円

著 者 大島幸夫

装 幀 杉浦康平＋鈴木一誌

発行者 和多田 進

発行所 株式会社 晩聲社

〒101 東京都千代田区神田駿河台3-2 山崎ビル

電話 (03) 255-4014/0030

振替・東京 6-50696

印 刷 福音印刷株式会社

製 本 ナショナル製本

用 紙 共和洋紙店

©Oshima Y.
Printed in Japan

乱丁落丁はお取り替えいたします。

沖縄ヤクザ戦争・目次

I

沖繩ヤクザ戦争——1 米軍手榴弾もカービン銃も

「旭琉会」対「上原組」「琉真会」／自ら掘らせた墓穴で射殺／制服警官に銃口火を噴く／県警本部長が異例の「射殺指令」／「山口組の代紋」は許せない／「勇吉、秀吉は組に帰せない」／「極道」の筋通すため／「このいくさ、五分と五分」

沖繩ヤクザ戦争——2 殺し合い、流血の軌跡

帰り待ち伏せ短銃乱射／元警官が殺人組員に／「金網時代」の社会的産物／草分けの「ゴザ十人シンカ」／発砲はヤマトからの「輸入」／覆面ゲリラ、ドス、日本刀／つぶし合いの死闘第5次

沖繩ヤクザ戦争——3 基地の島の巨大な利権

盗み・密買い、警察より重武装／自衛隊員や公務員も手引き／全国一の「アルコール天国」／遊技場もがっちり操る組織

II

1 島うたのコマンド——喜納昌吉

「エイサー」衣装で／楽しくやる戦争は／高校二年の処女作／刑務所でめざめて／死の直前に哲理を／反逆「島小」への鮮烈な愛／「肝心文化」の誇りで包め！

2 カンムリワシ・裸の挑戦——具志堅用高 77

まぶしい祝勝板／狙った獲物は必ず仕留める／連日・連夜のビデオ・ラッシュ
／海の自然児「ウーマター」／フロ下宿で猛練習／五輪よりプロを／「グマシマ」
からの執念に燃え／防衛新記録達成へ／その「揺りかご」は米軍基地

3 シールズの渡り鳥、巨人野球との交錯——ウォーリーと那嶺 87

スピード野球のメッセンジャー／人勝ち儲きて戻ていむり／二世部隊の総帥格
／川上・巨人に追われたあと／常勝巨人の神話を崩して

4 “大東京”から落ちこぼれた古典派怪盗——蜘蛛の陣十郎 112

なつかしや「梁上の君子」／ジ、ユ、とは聞のねえ街か／夜の銀座の大捕物！／
取調室で秘技を披露／快盗よサイナラ、サイナラ

5 アナタハン島からの戦後——比嘉和子 122

南洋流民の悲惨／あじゃこじゃ言うことない／奇怪な死がつづいて／舞台に映
画に出演／いまでも夢に見る

6 フィンガー5を育てた南島の息吹き——玉元松市 131

まだ舞台は一度も見ない／芸能界ぎらいの特攻隊生残り／子供が先手打った東京行き／工場で汗して自活の道を／「スターでなくて人間です」／大らかで海洋的な青春

7 琉球情歌にしみる日本の逆像——嘉手刈林昌 134

それは赤裸々な庶民の歌／はじめての師は母親だった／酋長の娘に思われムコ入り／放送スッポカシブタの世話／都会文化に向けた嘲笑かも

III

1 神々の解放区、宮古島のウヤガン祭り 138

「神」は生きていた／厳格なタブーの森から／海洋叙事詩の語り部／闇の中に走る老女／外界権力にこころの施錠／島弧をつなぐ／原思想▽

2 しまちゃびの祭り 174

伝承のリズムに乗って／大綱引きの興奮／大地に根ざした活気／方言で語る誇らしさ

3 舞踊劇『琉球怨歌』 184

通念へのアンチ・テーゼ／復帰に新たないたみ／沖縄の心は帰らぬ

IV

1 標準語よ、おごるなかれ 102

あつげにとられた裁判長／日本は祖国ではない／「方言札」の苦い思い出が／皇
民化運動の一環として／自身を主張するために

2 「沖縄時間」のハーモニー 201

秒針のない時計／南国的のびやかさ／夜の闇と満天の星／不便さの裏と表

3 虐殺死者との出会いから 211

生きてゐる故人／日本軍スパイ狩りの犠牲／韓国で見た久米島事件報道

あとがき 219

沖繩ヤクザ戦争——1 米軍手榴弾もカービン銃も

そこは戦場であつた。

復帰から六年目、一九七七年の沖繩。巨大な米軍基地から流れる多量の武器を手にしたヤクザたちが、血で血を洗う死闘、殺戮を重ねていた。ヤマト（内地）の新聞に報道されることは少なかったが、そこでは信じられないような凄惨な場面が繰り返されていたのである。米軍手榴弾の炸裂、カービン銃の乱射……たしかに、そこはアウトローたちの、惨烈な“戦場”なのだった。

■「旭琉会」対「上原組」「琉真会」■

沖繩行きの航空機内で、いく組ものハネムーン・カップルと乗り合わせた。

北海道には、もう、とうに初雪が降ったというのに、沖繩は、まだ、日かげが恋しい夏の気候である。南国の花、ハイビスカスが路傍に揺れ、プーゲンビリアの深紅の色あいもあざやかだ。

結婚シーズンの一〇月（一九七七年）、沖繩は、新婚好みの甘い旅路の島として、人気を得ている。



暴力団アジトは警察の警戒下に

しかし、実際の沖縄は、観光客向けの甘いムードどころではない。ヤマトに輪をかけた不況があり、失業があり、暴力団抗争がある。とりわけ、暴力団抗争の激しさは、ヤマトの比ではない。

土地の人たちは抗争のことを「いくさ」と呼び、あるいは「戦争」と呼ぶ。武器と武器とのむき出しの対決——それが沖縄暴力団の「戦争」の構図なのである。

米軍のすさまじい艦砲射撃を浴びた「鉄の暴風」沖縄戦から三三年目、沖縄はアウトローの裏社会にあって、再び「いくさ世」の島と化している。

交戦中であるのは、一方が沖縄暴力団の連合組織「旭琉会」、他方がこの旭琉会から分派した「上原組」、それに右翼団体「東亜友愛事業組合沖縄支部」から分派した「琉真会」だ。

旭琉会は、沖縄復帰前の一九七〇年一二月、関西の広域暴力団「山口組」系組織の沖縄上陸を警戒して、それまで沖縄で対立関係にあった那覇市を中心とする暴力団・那覇派と、コザ市（現在沖縄市）を中心とする暴力団・山原派が合流した形で結成、構成員は八〇〇人以上、準構成員を含めると、一三〇〇人から一五〇〇人を数える。沖縄はもとより、単一組織としては全国で最大の暴力団である。会結

成当時の幹部のうち、初代会長の仲本善忠は殺人の共同正犯で逮捕され、山原派を代表していた「ミ
ンタミ」〔目ン玉〕の意〕こと新城喜史、那覇派を代表していた「スター」こと又吉世喜の両理事長は
共に上原組との戦争で射殺されて、現在の二代目旭琉会は新城喜史直系の多和田真山が会長のイスに
ある。

上原組がこの旭琉会から独立したのは七四年九月である。当初は五、六十人の組織だったが、七
七年一〇月現在は一八人。上原勇吉組長は、旭琉会との戦争中に大阪方面へ姿を消し、その実弟、秀吉
が事実上の組長として上原組を仕切っている。

琉真会の旗揚げは、七七年の元旦で、構成員約一五人。組長、仲本政弘（七七年当時、三二歳）は沖
縄の行動右翼「誠会」（六六年一月結成、その後身は東声会沖縄支部から東亜友愛事業組合沖縄支部へ）に参加
していた。政弘の弟、政秀（同、二八歳）ら他の組員のほとんども旧東声会の流れをくむ。

ちなみに、東亜友愛事業組合は、東京に本部を置く東声会の解散（六六年九月）後、旧東声会会長の
在日韓国人、町井久之を名誉会長として発足した組織で、現在の本部理事長は呉南吉（山口組若頭補
佐扱い）、沖縄支部（約八〇人）の支部長は沖縄実業界に隠然たる勢力を持つ宜保俊夫である。

抗争三組織の簡単な紹介はこれぐらいにして、このところの「戦史」を順を追ってなぞってみよう。
旭琉会対上原組、現況は第二次戦争ともいふべきものであって、その前段の第一次戦争は、上原組
が旭琉会から分かれた七四年九月にふき上げている。そして、その根は、さらにそれ以前の沖縄暴力

団内部の長期にわたる抗争にからんでいる。

戦争の口火をめぐる双方の言い分は、後出の頂上インタビューにゆずるが、七四年九月二〇日、那覇市波の上の路上で起きた旭琉会幹部と上原秀吉ら上原組組員とのケンカ、その翌朝、旭琉会が上原組を襲った集団リンチ事件が、決定的な起爆剤となった。

沖縄ヤクザ抗争年表

74・9・17 上原勇吉ら上原組幹部が旭琉会理事会で謹慎処分を受ける

74・9・20 那覇波の上の路上で旭琉会幹部らと上原秀吉ら上原組員がケンカ。その翌朝、旭琉会組員は上原組員をら致して集団リンチ

74・10・24 上原組員二人が、宜野湾市の高級クラブ「ユートピア」で飲んでいた旭琉会理事長・新城喜史（当時四五歳）を射殺

75・10・16 旭琉会のもう一人の理事長・又吉世喜（当時四二歳）が自宅近くの那覇市繁多川の路上で犬を連れて散歩中、上原組員に射殺される（犯人三人の逮捕は翌

74・10 新城理事長殺害の報復で山城長栄上原組幹部が捕えられ、南部戦跡、平和の塔、近くの崖下に投げ棄てられる（遺体は同年二月一五日に発見）

75・2・14 上原組員仲宗根隆ら三人が旭琉会幹部ら七人に国頭村楚洲の山中に連れ込まれ、惨殺されて埋められる（遺体発見は同年七月二四日）

76・1・30 旭琉会の内部抗争で同会新天地グループ責任者の我喜屋良善（当時三二歳）が那覇市内の路上で射殺される

76・4・11 普天間署に留置されていた旭琉会組員が、仲間がこっそりと差し入れた短銃を発砲、警官につきつけて脱獄をはかる。まもなく逮捕

76・8・21 旭琉会喜屋武グループ幹部の一人が、同派内の別の幹部の一人と決闘の末殺され、糸満市の海岸に埋められる（遺体発見は同年十一月一三日）

七六年四月七日）

76・1・30 旭琉会の内部抗争で同会新天地グループ責任者の我喜屋良善（当時三二歳）が那覇市内の路上で射殺される

76・4・11 普天間署に留置されていた旭琉会組員が、仲間がこっそりと差し入れた短銃を発砲、警官につきつけて脱獄をはかる。まもなく逮捕

76・8・21 旭琉会喜屋武グループ幹部の一人が、同派内の別の幹部の一人と決闘の末殺され、糸満市の海岸に埋められる（遺体発見は同年十一月一三日）

76・12 上原組が山口組若頭補佐
大平組松浦一雄と結縁、那覇市内
に山口組の代紋を掲げる
77・1・1 琉真会・仲本政弘(三
〇歳)も大平組舎弟頭・古川真澄
と結縁、旗上げをする
77・1・24 琉真会アジトに内偵
の旭琉会組員四人のうち一人がつかまり、豊見城海岸でリンチにあう
77・3・4 那覇市久茂地の琉真
会アジトに短銃が発射される。うち二発が階下の商會社に命中
77・3・8 アジト近くで琉真会
組員の乗った乗用車が撃たれる。
同日、県警は「旭琉会対上原一家・
琉真会対立抗争事件取締総本部」
を設置
77・3・17 琉真会アジト裏の民
家二軒に銃弾四発が撃ち込まれる
77・3・24 那覇市首里山川のホ
テルグランドキャッスルの床屋で
散髪中の上原組幹部松茂良弘らと

旭琉会組員らがハチ合わせ、双方
約三〇人が入り乱れてホテル内の
追跡劇
77・4・25 県警、上原吉組長
を又吉世喜旭琉会理事長殺害の容
疑で全国に指名手配
77・5・13 琉真会・仲本会長の
ボディガード二人が撃たれ重傷
77・5・15 上原秀吉組長の車が
撃たれ、弾丸は車のドアを貫通
77・5・18 那覇市内で上原組員
二人が待ち伏せの上、撃たれて
死傷。その直後、首里でも上原組
の車追跡、発砲
77・5・19 山口組系大平組の三
〇人余が空路来沖。県警に追い返
される
77・6・1 航空自衛隊知念分と
ん地からカービン銃八丁が盗まれ、
旭琉会に。手びきしたのは自衛隊
員とわかり逮捕
77・7・8 上原組幹部ら三人襲
撃されて重傷

77・7・30 那覇市辻の旭琉会本
部前で同組員、撃たれて重傷
77・8・2 那覇市内でクラブ従
業員、誤って撃たれ重傷
77・8・10 琉真会アジトを警戒
中の機動隊員、旭琉会組員に撃た
れ重傷。琉真会アジトには手榴弾
が投げ込まれる。同日、県警本部
長は異例の「暴力団射殺命令」を
出す
77・8・23 台風に乗じて、首里
桃原の上原組のアジトに発砲。民
家も被害
77・9・2 警察庁 那覇に広域
暴力団壊滅作戦會議を招集
77・10・12 住民パワーの締め出
しで琉真会アジトを撤収

■自ら掘らせた墓穴で射殺■

集団リンチ事件では、上原組の若い組員七人が拉致され、バットや木刀でメッタ打ちにあったうえ、一人が局部をベンチでむしり取られるほど凄惨な目にあつた。ベンチによる被害者は、復讐の念に燃え、傷がいえるや、翌月の一〇月二四日、上原勇吉組長のボディガードだった日比混血の先輩組員に連れられて、宜野湾市の高級クラブ「ユートピア」に武装なぐり込みをかけ、そこで、二人は旭琉会理事長、新城喜史（当時四五歳）を射殺した。すかさず、旭琉会は射殺された理事長のアダ討ちに動き、上原組大幹部、山城長栄を捕えて殺し、喜屋武岬の南部戦跡「平和の塔」近くのカゲ下に投げ捨てた（遺体は同年一二月一五日に発見）。

さらに翌七五年二月一四日、上原組の仲宗根隆（当時二二歳）、嘉陽宗和（当時二二歳）、前川朝春（当時二二歳）の三人を、旭琉会幹部、友寄倉茂（当時三七歳）ら七人が、国頭村楚洲の山中に連れ込んで惨殺。逮捕された犯人らの自供によって、同年七月二四日、変わり果てた三人の遺体が楕円形の墓穴の中から掘り起こされた。

墓穴は三人が自ら掘らされたものだった。墓穴の中に立たされた三人は「組長の居場所を知らせろ」とおどされ、「知らない」と言い張ったため、五丁もの短銃で弾が尽きるまで撃たれ、倒れた身体に土をかけられた。それでも嘉陽はなお生きていて、必死に土をはねのけ、よろよろと這い出した。すると、今度は心臓部をドスでメッタ突きされ、こめかみにとどめの一発まで撃ち込まれて、穴に投

げ入れられたという。このきわめて残忍な犯行には、犯人らの自供で、上部からの指令があったとわかり、共同正犯で仲本善忠旭琉会会長が逮捕された。

同年一〇月一六日、六人目の犠牲者が出た。旭琉会のもう一人の理事長だった又吉世喜（当時四二歳）が、自宅近くの那覇市繁多川の路上で、土佐犬を連れて散歩中、上原組組員に射殺されたのである。

その日の朝、又吉は一二五ccの単車に乗り、ヘルメットをかぶって、犬を引いていた。後ろに子分三人のボディーガードが乗用車でついてしたが、上原組組員はフルスピードのワゴン車でボディーガード車を追い抜き、又吉に短銃を発砲、五発のうちの四発が胸、腹部に命中した。ボディーガード車はワゴン車を追って、車上からギャング映画もどきの銃撃戦をくりひろげ、いったん逃亡した三人の犯人は、翌七六年四月七日になって逮捕された。犯人の一人は楚洲山中で殺された仲宗根隆の実弟であった。上原組組長・上原勇吉は、この又吉殺しを関西の潜伏先から指令したとされ、殺人共同正犯で現在、全国指名手配中である。

ここまでの動きが、旭琉会と上原組の間でのいわば第一次戦争である。

第二次戦争は、七六年一二月はじめ、那覇市曙のビル内アジトに、上原組がヤマトの広域暴力団、山口組系大平組の代紋を掲げたことから公然化した。

大平組の本拠は兵庫県尼崎市にある。組長、松浦一雄は山口組の若頭補佐で、神戸市の山口組本部